

父は苦学の人だった。明治45年、新潟の貧農の四男坊として生まれ、いわゆる「口減らし」のために尋常高等小学校を出てすぐに奉公に出された。その先が歯科医院だった。雪の降りしきる寒い冬、医院の雑用をしながら思ったという。「こんなことで一生明け暮れていいのか？」。

当時、外地（日本本土を「内地」と言い、朝鮮、台湾などを「外地」といつていた）では検定で歯科医師になれる制度があった。幸い新潟港からは朝鮮（韓国）釜山行きの船が出ている。父は一念発起し、わずかな給金を貯めて何度も朝鮮に通い、そこで検定に合格した。但し開業地は「外地」に限られていた。

単身京城（現ソウル）に渡り、そこで開業し母とめぐり合った。間も無く召集、戦場に行く前に終戦となり引揚者ひきあげしやとなった。奉公先に義理立てしたのだろうか、故郷の町で開業せずその隣の小さな無医村で歯科医となった。特例で外地の歯科医師免許が内地でも認められたのだ。「引揚者」の負い目もあってか、他人には常に低姿勢だった。

思春期を迎えた頃、そんな父が無性に頼りなく思えてきた。友達の父親に「威厳」を感じ、急に父が嫌いになった。その頃の僕に終戦時の苦労などわかろうはずもなく、わずかな小遣いもままならない貧しい生活もすべて父のせいだと思い込んでいた。昭和40年頃のことである。当時、田舎はどここの家庭も貧しかった。

それから20年の月日が流れた。僕は父と同じ歯科医師の道を選んだが、両親の待つ故郷ふるさとに帰らずに、何のツテもない東京郊外で開業した。幸い仕事は順調だったが、「歯科医師会」には苦労した。何度会長宅に日参しても入会の許可が得られないのだ。会は友好団体とはいえ所詮ライバル同士の集まりだから、新参者にはかなり冷たい。まして、僕は開業場所の制約などの入会規定（当時）に抵触していた。その結果保険業務などに支障が生じ、支払基金に呼び出されて、技官から高圧的な指導を受けるという嫌な経験もした。若い僕にはまるでいじめのように思えた。

ようやく入会が許された後もそのわだかまりが消えず、プライドだけは一人前のまま、いつまでも地域の歯科医たちに馴染めずにいた。

そんな折、父が上京した。父は滅多に帰郷しない僕と酒を飲むと、決まって涙ぐんだ。寂しさと嬉しさの入り混じった涙だったのだろうか、僕はそんな弱い父を見るのが嫌だった。仕事や遊びに忙しかったから、父をいたわる余裕などなかった。考えるのは自分のことばかりで、その日も僕は歯科医師会の旧弊を父に嘆いていた。

たまたま翌日、医師会主催の飲み会があった。父はその会合に一緒に行くと言う。珍しく頑固に言い張る父を連れて、しぶしぶ会に出た僕は、そこで思いがけない光景を見ること

になる。父は宴たけなわになると、なんとすべての出席者に酌をして回ったのだ。隅の席で縮こまっている僕を差し置いて次々と席を移動し、そこには前の晩とは打って変わって陽気で賑やかな父親がいた。手招きで僕を呼び寄せた重鎮の歯科医が言った。「こりゃ、君より一枚上手だな」。

それからしばらく経った例会で僕は初めて知ったのだ。父はその折、誰彼構わず、最後に必ず言っていたという...「息子をよろしく」と。

あれからさらに40年近くの歳月が流れた。思い立って父の姿を「切り絵」にしたいと思った。僕はアルバムのなかから、あえてもっとも威厳のある顔を選んだ。でも切り終わって思う。父として、人として大切なのは「威厳」などではなく、「謙虚さ」や「誠実さ」なのだ...

父が亡くなって18年、今年僕はあの日の父と同じ年齢になる。

2021年6月1日 記